能力の分布

引っ張る人･ささえる人･ぶら下がる人

能力の分布

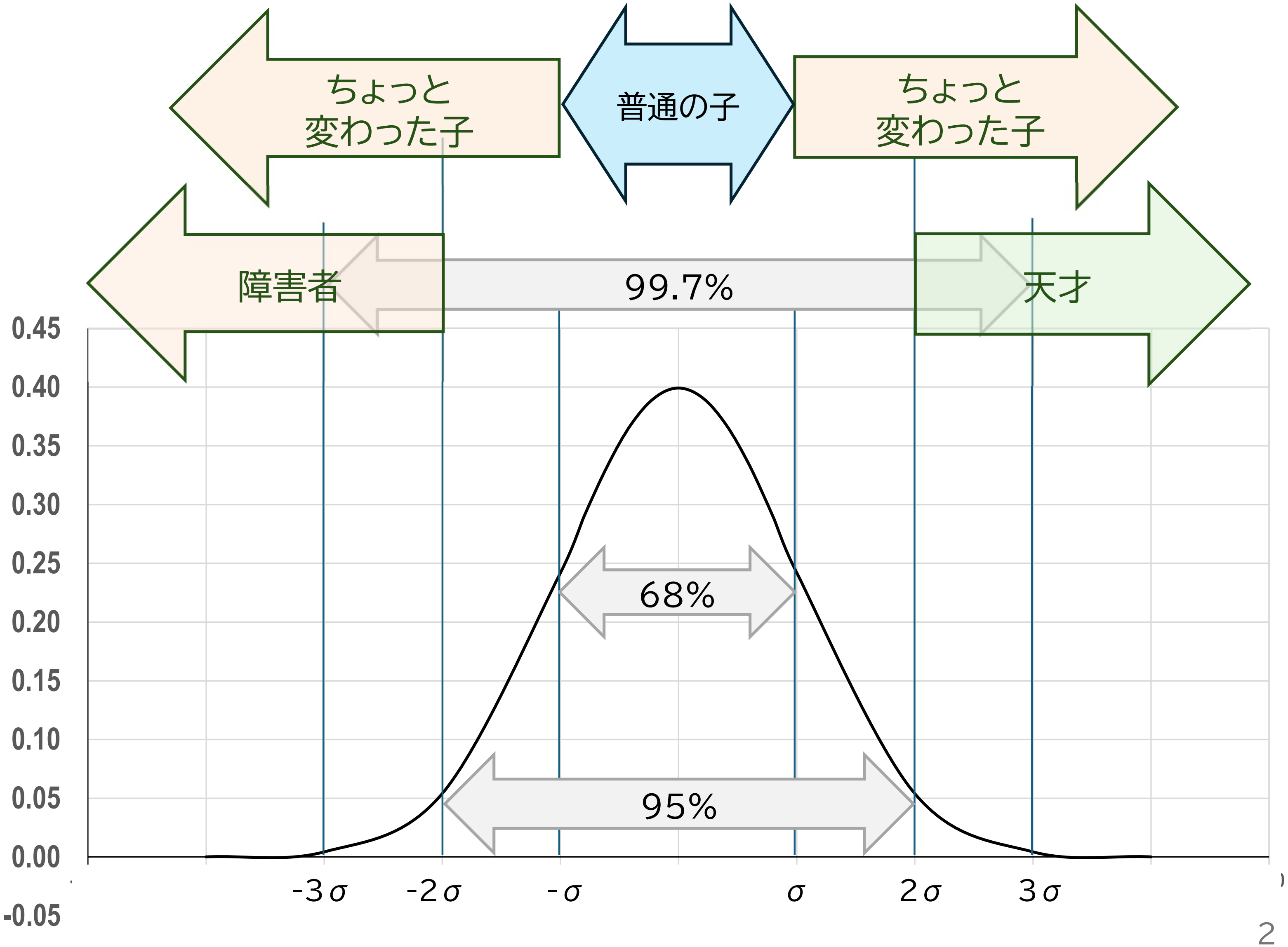
生物学の様々な機能が正規分布に従っていると考えてもいいようだ。

能力に関わるものとしては、神経伝達速度、神経伝達物質の量、記憶の保持時間、刺激の受容から反応までの時間、などなど。

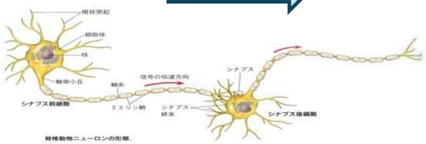
刺激の受容器官は、目、耳、舌など、運動の器官は、骨、筋肉。

さまざまな構成物質の総体として個体の能力が構成される。

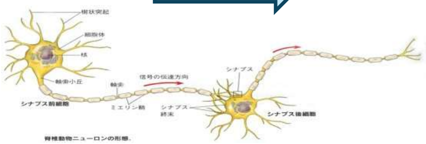
その総体の分布が正規分布とすると、平均的な人68%、ちょっとかわった優れた子16%、ちょっと変わって支援が必要な子16%。



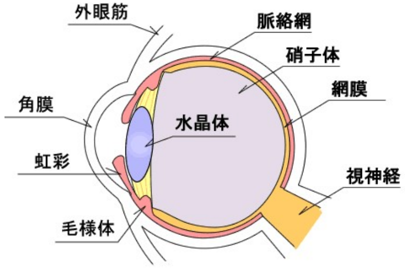
受容器

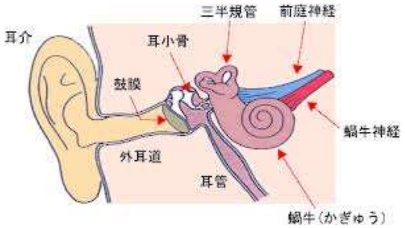


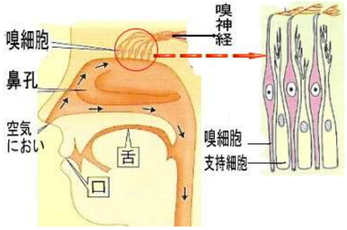
中枢神経

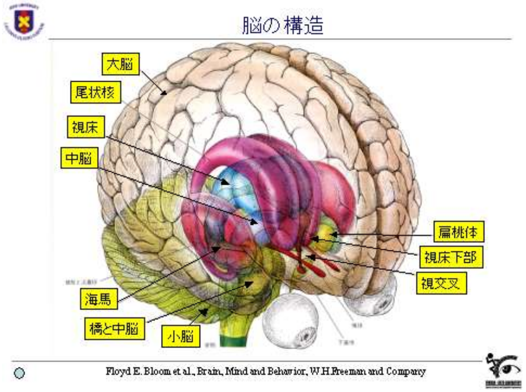


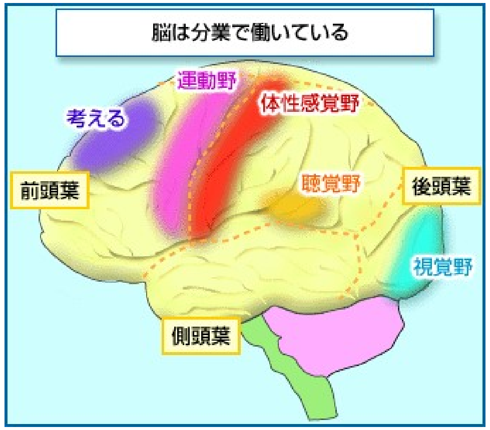
効果器

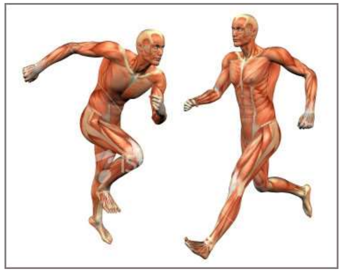












表現能力

能力の分布

大人の責務

例えば知能、IQ70以下は知的障害者として支援の対象になる。

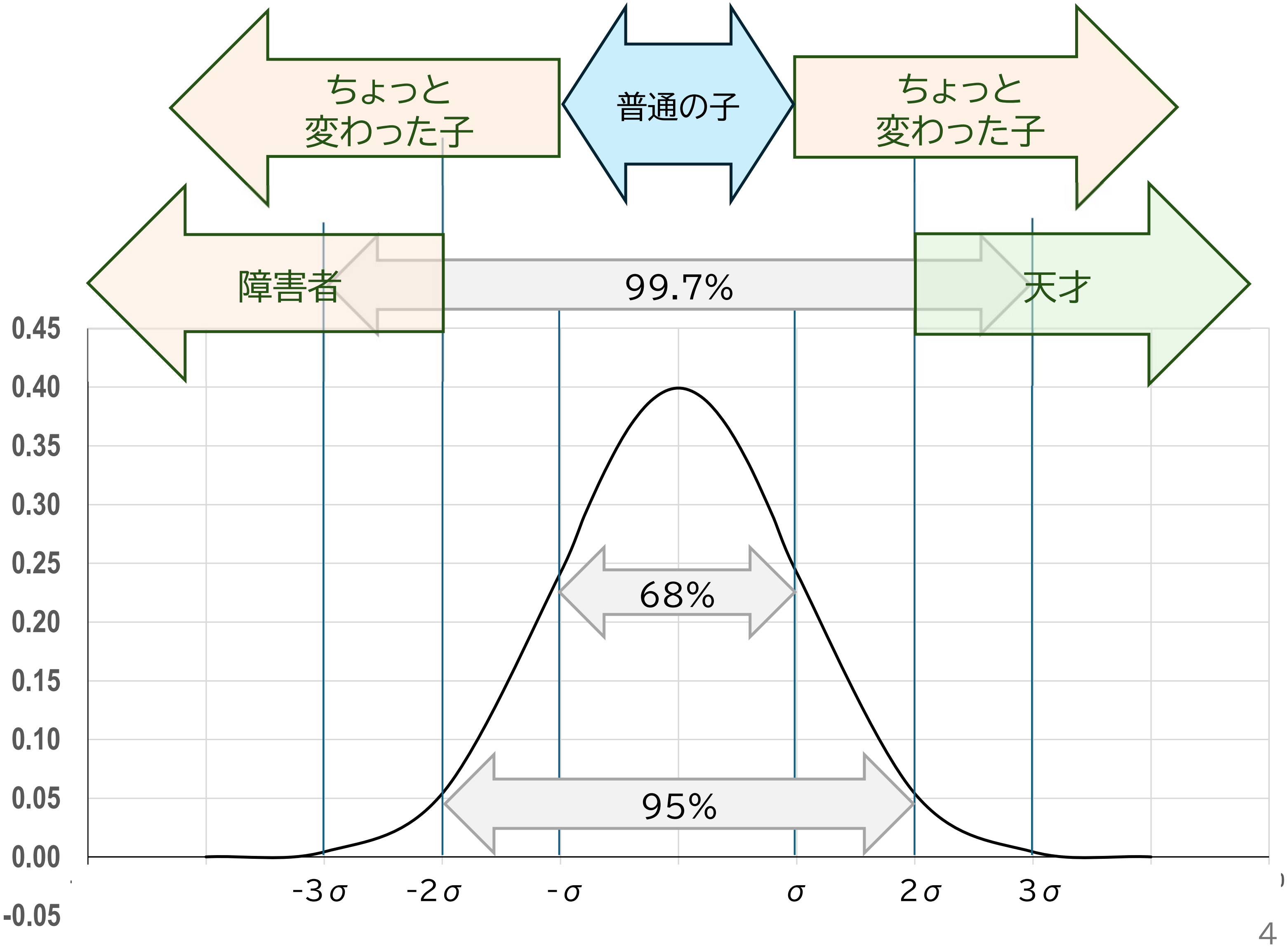
IQ130以上で特に優れた能力がある人は学問をリードする。

運動能力の優れた人、将棋や囲碁の強い人、絵画や音楽の感性の際立っている人、天才と呼ばれる。

行動や性格がちょっと変わっている人もいる。天才と呼ばれる人も別の特徴を見ると変わっている子だったりする。

普通の子の中にも、記憶力や感性や特定の勉強ができる子がいる。

子どもたちがもって生まれた資質を伸ばすことが大人の義務だ。



働きアリの2:6:2の法則

引っ張る人・ささえる人・ぶら下がる人

アリの世界でも人間社会でも、よく働くのは2割、普通に働くのは6割、あまり働かないのは2割という法則があるそうだ。

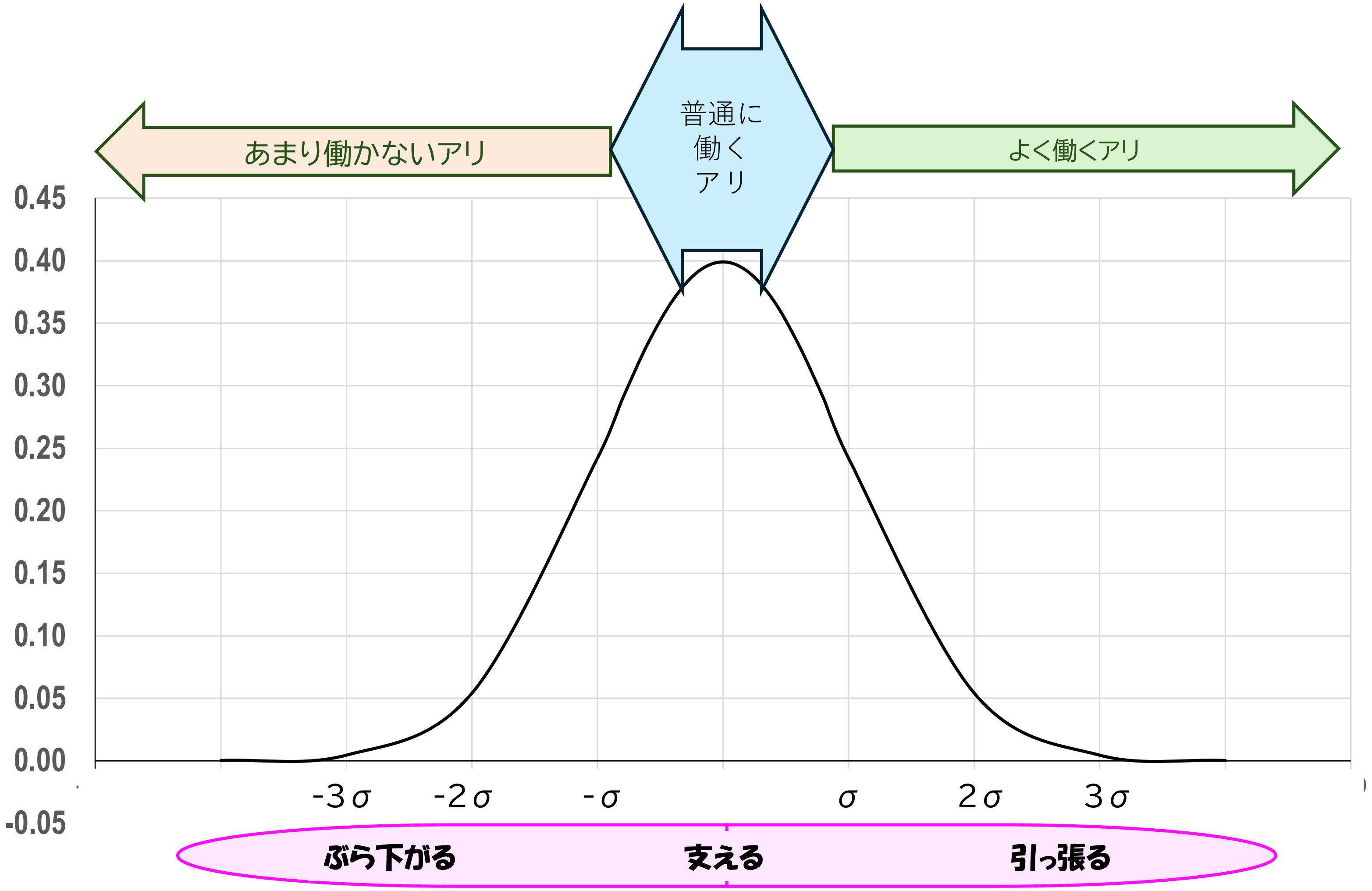
別の言い方で、引っ張る人、支える人、ぶら下がる人、などといわれることもある。

よく働く人だけを集めても、そのうち2:6:2になるそうだ。

特異な能力で世界を救うのが2割のオタクだとすると、世界を支えるのは6割の凡人。

オタクは社会に適応する力が強くないので、ぶら下がる人のように思われることが多いが、実は引っ張る人になる可能性も大きい。

特異な能力で世界を救う2割のオタクを、6割の凡人は大切にしなければいけない。

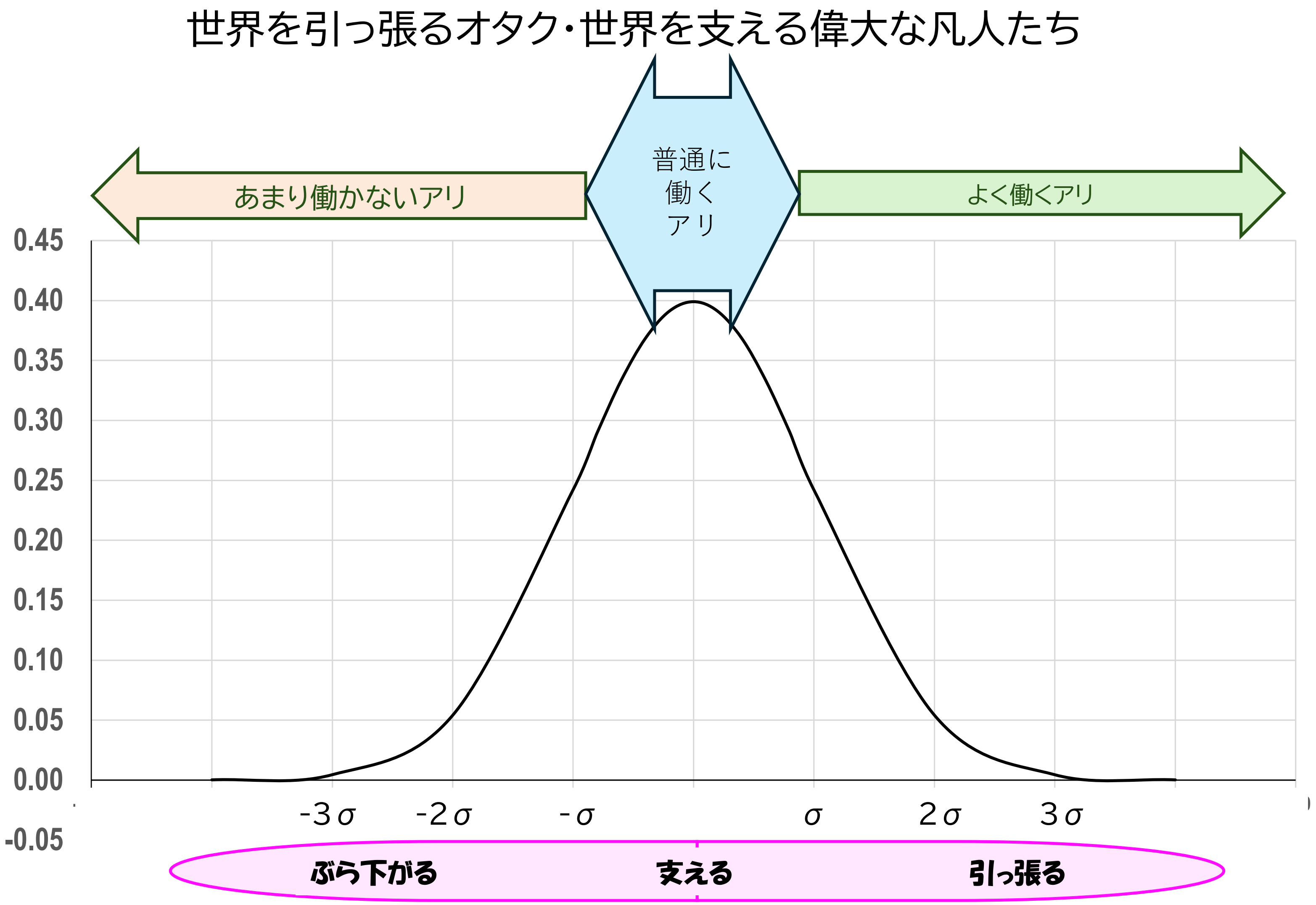


働きアリの2:6:2の法則

将来偉大な凡人たちになる子どもたちも、特徴的な能力をもっているはず。それを探してあげて自己肯定感を高めてあげるのが大人の義務。

どんな子にも、自分を開拓する力をつけてあげなくてはいけない。遊ばしているだけでは子どもの能力は伸びない。

新渡戸稲造は教育の目的を、「自分より優れた人物を育てること」とした。

誰がどの役割を担うかわからないから、大人は公平に子どもを扱わなければならない。

それが、子どもの尊厳を守ることにつながる。